

平成二五年気良歌舞伎

近江源氏先陣館  
おうみげんじせんじんやかた

盛綱陣屋の場  
もりつなじんやば

配役

佐々木三郎兵衛盛綱もりつな

高田 和範

和田兵衛秀盛びょうえいひでもり

奥村 将典

盛綱母 微妙みみょう

澤 奈央也

高綱妻 篝火かがりび

高田 新一郎

盛綱妻 早瀬はやせ

鈴木 雅敏

高綱一子 小四郎 (子役)

澤 奏真 (小3)

盛綱一子 小三郎 (子役)

佐藤 魁星 (小2)

信楽太郎しがらき

坪井 和也

伊吹藤太とうた

佐藤 憲司

竹下孫八

鈴木 博貴

北条時政

和田 憲明

古郡新左衛門

林 大樹

榛谷十郎はんがえ

軍卒・北条家臣

呼び お使者のお入り。

◆甲冑の姿引きかえて 長袴踏みしだき さしも武骨の荒くれ男

(卜向こうより秀盛、奥より盛綱出る)

盛綱 珍しや秀盛どの、いざまずこれへ。

秀盛 許し召され。

◆目礼式ゆうゆうと 上座にこそは打ち通る

秀盛 さて、このたびの合戦、佐々木、三浦、かく申す和田兵衛、火水の勝負を決せんと、牙を嚙

んで相待つところ、鎌倉方の遊長武士、一日寄せては二日見合わせ、この方ほとんど退屈

いたす。それ故にこそ、かく具足を取り置き、大平の姿にて、坂本の城より使者に参った。

盛綱 これはこれは、名にしおう和田兵衛秀盛どの、よくよくの儀なればこそ、使者の趣き、仰

せ聞けられください。

秀盛 別儀でござらぬ。今朝高綱の構えにて、そこ許の手に生け捕られし小四郎高重、ちとこの

方にて入用なれば、只今お返し下されとの使者でござる。

◆事もなげに述べければ

盛綱 こは存じもよらぬ御事。何ぞや、あの童一人づれに、敵方の侍大将、自身に駒を進むる

とは、珍説、珍説。あの小倅一人なくんば、合戦も得なされぬか。何故の懇望、事おかしゆ

う存ずる。

◆とあざ笑えば

秀盛 実にもつとも。しかしこの方にて不審なるは、その童わらんぼの小四郎を、貴殿の子息が生け捕られしを、何ぞや、一城いっしやうをも乗っ取りし如く、勝どきあげて引き上げしは、これ如何いかに。さほど鎌倉方に懇望こんもうせらるる小四郎なれば、この方にも惜しゅう存ずる。そのかわりこの秀盛が首進上しんじやう申す。お望みならば手柄次第てがら、随分取ってご覧なされ。

◆むずと座したる不敵の有様 盛綱打ち笑み

盛綱 さてさて、弟ながら高綱は、大功たいこうの勇士と思いに、倅せがれに迷みれんう未練しやうねの性根。

秀盛 そこを察さつして朋輩ほうばいのよしみ。

盛綱 命を助くる情けの使者か。

秀盛 如何いかにも。

盛綱 はてな、あれほどの小倅しょうさい、いかようにとも申したけれど、もはや生け捕りの帳ちやうに印せし上は、時政公よりお預めかりの囚人めしうど、盛綱私わたくしにはいたされず。ならば踏ふん込み奪むい取とりて帰かへられよ、秀盛その座いっすん一寸も、立たせはせじ。

◆反り打って詰めかくれば

秀盛 サササ、お急せき召めさるな。貴殿きでんと某それがし、今この所に刺し違ちがえては、敵味方に良よき大将ににん二人を

失い、これ両損。貴殿のままにならぬ囚人、ウン、この上は石山の陣所へ参り、時政どのに面談なし、自他とも所望いたして帰る。

盛綱 そりや兎も角もご勝手次第。さわらば石山のご陣所へご案内申させん。やあやあ者共、はやまいれ。

大勢 ハア。

◆はつと答えて用意の組子 ばらばらとおっ取り巻く

(ト軍卒出で来る)

軍卒一 いざ。

軍卒皆 御案内。

秀盛 テ、仰山な案内、ダハハハ。敵の陣所へのうのうと、一人で参る和田兵衛、土地不案内の無骨者、万事よしなに。

盛綱 気遣いあるな。大将の傍近く御案内申す上は、大事の珍客。随分御酒を、ナ、合点か。

秀盛 ナニ御酒、御酒とはかたじけない。我ら別して大好物。お望みならば湖をもかえ干してご覧にいれ、また、お肴の飛び道具、槍、長刀の串肴、何本なりとも賞翫いたす。盛綱どの。

盛綱 和田どのの御苦勞。

秀盛 案内、大儀。

◆と長袴 ながばかま 虎を放してやる勇氣 火焰の中へ行く大胆 心の具足 ぐそく 鉄石の石山 てっせき

(ト秀盛、軍卒と向こうへ入る)

◆盛綱はただ茫然と ぼうぜん 軍虜を帷幕の打ち傾き ぐんりよ いばく 思案の扇からりと捨て

盛綱 ははびと 母人それにおおするや、苦しからねばちよとこれまで。

◆訪う声に おとの

(ト微妙、上手の障子の内にて)

微妙 母はこれにあります。今、それへいて逢いましょう。

◆しずしずと立ち出ずれば

(ト微妙、上手に座る)

微妙 この母を呼びやったは、何ぞ用がしあつてのことか。

盛綱 しばらく。

◆陣屋の隅々 くまぐま 後先見回し 母の傍へすり寄って そば

盛綱 親の役目を子が勤むるは順なれども、ご老体の母人に御苦労かけ、お頼み申さねば叶わぬ

事、申さぬ先から心得たと、御誓言を承りたし。 ごせいごん うけたまわ

◆事ありげなる願いの品 聞かねどさすが佐々木の後室 打ちうなずき

微妙 親子の中で改めて、頼むとあるは、よくよくの事ならん。仔細は知らぬが、心得ました。 しさい

盛綱 ハハ、早速のご承知まずもってかたじけなし。お頼みと申すは今朝の囚人、拙者がために  
は甥、母人には孫の小四郎、今宵のうちに母のお手にかけられて。

◆聞きもあえず

微妙 コレコレ盛綱、最前我が君の仰せには必ず小四郎に過ちさすな、殺すなどの御詫ならずや。  
盛綱 サササ、その殺すなどの御詫ゆえ、なおもって殺さにやなりませぬ。弁舌をもつて人をなづ  
くる北条どの、小四郎を殺すなどの御詫は、生け置いて人質となし、子を餌にこうて高綱を  
味方に付けん謀りごと、鏡にかけて現れたり。なかなか一心に變ずべき弟高綱とは思わねど  
も、如何なる大丈夫も、我が子の愛には迷う習い。もし万が一、この謀りごとはかに陥おちって、  
降参などの心付かば、子ゆえに不忠の名を汚さん事、残念至極。よし左はなくとも小四郎  
が、虜とりことなつて生きあるうちは、恩愛おんあいという大敵に、高綱が弓勢ゆんぜいも弱り、刃金はがねも自然とな  
まる道理。迷いの種こいねのあの小四郎、一時も早く殺しなば、弟が義心ぎしんなおなお鉄石てつせき。これぞ兄  
弟弓矢の情け、とあつて我が手にかける時は、主君北条どのの命に背く。稚心おさなこころにこの理を  
わきまえ、自身に切腹いたしなば、我は油断の過ちばかり。兄が義も立ち、弟が忠も立つ。  
双方まったきこの役目を、ご苦勞ながら母人さま、今宵のうちに小四郎に切腹させてたまわ  
れかし。現在の甥おいの命、申しなだめて助くるこそ情けとも言うべきに、殺すをかえつて、情  
けとは。

◆情けなの武士の有様や

盛綱 如何なればこそ兄弟が、敵味方と引き別れ、今朝の矢合わせにも、敵は甥なり、味方は我が子。肉親と肉親の剣を合わす、血汐の滝。

◆修羅の巷の攻め太鼓 胸に盤石こたゆるつらさ

盛綱 弓馬の家に生まれし不肖、聞き分けてたべ、コレ。

◆コレコレ 聞き分けてたべ 母人と事を分けたる物語 母は手を打ち

微妙 アアもつとも、もつとも。兄のそなたも、弟の高綱も我が子に依怙は無けれども、へだてて軍へ未練もまさり、ありようはそなたにも、心を置いていました、弟に不忠の悪名を立てさせまいとの心遣い、チエ、かたじけないぞや。

◆嬉しいぞや

微妙 世のたとえにも、小の虫を殺して大功を立つるとやら。真実真身は子よりも可愛い孫なれども、思い切って切腹さししよう。

盛綱 ハハ、おでかしなされた。健気ものとは思えども稚き小四郎、もし小腕にて切り損じなば、母人よろしくご紹介。

微妙 心得ました。

(トこのとき釣鐘なり)

盛綱 はや短日たんじつの暮れ近し。

微妙 思えば佐々木兄弟が、苗字みょうじを汚すか。

盛綱 名を上ぐるか。

微妙 生死しやうじの境。

盛綱 涙なみだばしかけ給うな。

微妙 気遣いめ召さるな、遅れはせず。

盛綱 必ずきづよ気強う遊ばせや。

◆渡す一腰 受け取る腰の張弓ことばに 詞つごうて別れ入る

(ト盛綱は奥へ、微妙は上手に入る。太鼓、鐘なり)

◆峯吹き通す木枯らしに はや園城寺の鐘もろとも 誘われ来たる白羽の矢

(ト上手の紅葉の立木に矢文)

◆紅葉の茂みに射こみしは主を誰とも人目せく 陣笠まぶかに篝火が

(ト向こうより篝火出て来る)

◆男出立ちの半弓はんきゆうに やわか仇あだには帰らじと 陣屋間近く慕い寄り

篝火 和田どのの供回りにまぎれ込み、ここまでは忍びいったれども、用心厳しき陣屋の木戸口、

心を通わす矢文の謎、小四郎の目にかかれかし、祝いに祝うた初陣ういじんに、忌まわしい縄目なわめの恥、

ほかの手でもあることか、従弟同士の小三郎、憎てらしい手柄顔、甥を縛らせ伯父の身で、それが本意かうらめしい。どうしているぞ、只ひと目。

◆見たい逢いたい間の戸に わが身をひしと楯板も 通すは涙の矢数なり

洩れてや奥に声高く

早瀬 侍中侍中、夜回りおこたり申されな。

◆女の声も敵の中 胸驚かれ篝火は 差し足ながら忍び行く

(ト篝火、下手に忍ぶ)

◆障子をさつと目早の早瀬 紅葉の矢文抜き取って

(ト早瀬、奥より出る)

早瀬 さてこそさてこそ、羽響きもなく忍びの矢。女業と推量に違わぬこの手跡、名にしおはば逢坂山のさねかずら、人に知られで来るよしもがな、と古歌を書きしは。手は見知らねど相嫁の篝火、囚われの小四郎に、この陣屋を抜け出でて、人知らず来るよしもがな、ここは所も近江路や、世に逢坂の関の戸を、明けて逢わんと知らせの謎。エエ、侍の母のようにもない、未練なさもしい。軍に立てば討ち死には覚悟の前と、立派な小四郎に悪気を付け、もし取り逃がしなどしたら、その不調法は誰にかかる。一家のよしみは生け捕っても命に別状ない様子知らせて安堵さすほどに、必ずここらにうろたえて、親子一緒の縄目を受け夫の名

まで汚しやんな。

◆恨みの裏の反故文 打ち返したる返事の古歌 在りあう硯さらさら 書きしたためてくりつけ うちにも人目重藤の 弓打ちつがい陣外の 小松にひようと手ごたえと 共に立て切る障子のうち

(ト早瀬、弓をとり、矢文をうち、奥へ入る)

◆稚心に油断せぬ 縄付ながら小四郎は そっと一間を忍び出で

(ト上手部屋より小四郎、縄付きのまま忍び出で)

小四郎 今伯母様の読ましやった矢文の手は母様。ここを抜けて戻れとの知らせは聞いても敵の中。

◆見咎められては恥の恥

小四郎 とはいえ母様どこにごさる。死すともちよつと顔見たや。

◆そろりそろりと抜き足も 危うき毒蛇の陣の口 あわや後よりうかがう微妙

(ト小四郎、木戸口へ行こうとする。上手部屋より微妙伺い出で)

微妙 小四郎まぢや。

◆と声にびっくり

小四郎 いえ、どっこへも行きやいたしませぬ。お許しなされてくださりませ。

◆わなわな慄う有様を つくづく見れば見るにつけ

微妙 同じ佐々木の身内でも、さても果報つたない子よ。囚われの身となつたれば、子心にも気おくれして、みすぼらしいなり形。これ、わしはそなたの祖母じゃわいのう。器量骨柄揃うた子に、いたいたしいその縄目、解いてそなたにこの婆が、言い聞かすことがある。ささ、ここへおじゃ、ここへおじゃ。

小四郎 あい。

◆立ち寄りほどく血筋の縄 子故にひかれ篝火が 又立ち戻る陣屋の前

(ト下手より篝火出て、矢文を抜き取り開き見て)

篝火 矢文の返事は兄嫁の早瀬の手跡。これやこの行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の関、知るも知らぬも逢坂のせ・・・、時節を待てとのことかいなあ。

◆いかにと見やる戸のすき間 微妙は孫にうち向かい

微妙 これ小四郎、よう聞きやや。高綱に別れてより十三年の年月、孫ありと聞いたばかり。懐かしさ逢いたさは、膝元に育つた子三郎より、顔見ぬそなたが不憫さは百倍。思いおくこと片時も忘るる暇はなけれども、思うにまかせぬ敵味方。これは婆がそなたへ引き出物、ササこれ着てたもや。

◆と差し出だせば 何心なく押しいだき 取り上げて不審顔

小四郎 申し婆さま、この袴にはなぜ紋がござりませぬ。九寸五分も添えてあるは、高名手柄せ

よとある、首かき刀でもあるまい。こりや、わしに腹切れとの死装束でござりまするか  
◆悟る利発に驚く篝火 微妙はがばと泣き倒れ しばし言葉もなかりしが

微妙 さすがは親の子ほどある。聞き分けよいほど助けたさは胸いっぱいにも迫れども、殺さにやならぬ、その訳は。そなたの父高綱が武勇智謀にすぐれしが、そなたの身の仇敵、助けよとある北条どのは、子を人質に高綱を、降参さする謀りごと。それまでは殺しもせず、まして助けて帰しもせず、何時までも陣中に留めておけとの主命。生きているほど親高綱が武勇の妨げ。サここの道理を聞き分けて、潔う死んでたも・・・目元なら鼻筋なら眉にひとつのほくろまで、父親にこの似よう。智慧才覚まで揃うた子に、生い先も見ずむざむざと、つぼみの花を散らすかいや。

◆老いの繰り言 涙のはぐき もれて外面に聞く嫁の  
篝火 なんぼ道理は道理でも、あんまり気強いおふくろ様、我が子は殺さぬ、殺しはせぬ。

◆伸び上がれども芦垣の へだつる中ぞ是非もなき

母の心通じてや 小四郎おとなしく手をつかえ

小四郎 わしが命ひとつで、父様や伯父様の手柄にさえなる事なら、なんの惜しみはいたしませぬ。もつとも、腹の切りようも稽古しておいたれば、切り損ないもせまいけれど、わしが一つのお願いは、昨日軍の初陣に、すぐに敵に生け捕られ。

◆このまま死ぬるは 弓矢神の冥加にも尽きたかと なんぼう悲しい口惜しい

小四郎 どうぞ、ま一度お帰しなされて、父様や母様にたった一目逢うたうえ、せめて雑兵の首ひとつ取って、立派に死んで見せましよう。このお願いを。

微妙 賢いようでもさすがは子供。お預かりの囚人を敵へ帰して盛綱の武士はどこで立つ。とても叶わぬそなたが命、最期が未練であったなどと、口の端にかけられては、親高綱が武勇の妨げ。サこの道理を聞き分けて、潔う切腹したも、や、や、や。介錯はこの婆、可愛い孫を先立てて、何時まで因果な恥さらそうぞ。婆もすぐに自害して、三途の川をコレ手を引いて。

◆渡るわいのと抱きしめ 泣く泣く剣差しつくれば

小四郎 ただ二親に逢うまでは許してくだされ、これ婆さま。

◆未練も親子の恩愛に 道理といとど目もうるうる 孫もうるうる隙あらば

逃げんと見やる木戸口の

篝火 母はここにおりますわいのう

◆ここにと母の呼ぶ子鳥

小四郎 やあ母様か。

◆かけ出す孫を引き止めて

微妙 エエ卑怯者、未練者めが。さては母と内通してここを抜け出る心じやな、それなれば尚、助  
けられぬ。母にも一目逢わせたからは、潔う切腹するか。

小四郎 サアそれは。

微妙 ただしは、婆が手に掛きようか。

小四郎 サアそれは。

微妙 切腹するか。

小四郎 サア。

兩人 サアサアサア。

微妙 孫よ返事は、ナ、ナ、なんと。

◆おどしに抜いて振り上ぐる 剣の下に手を合わせ

小四郎 母様の声聞いて、一倍命が惜しゅうなつた。助けてくだされ、これ婆さま。

◆おくれる孫になお氣おくれ

微妙 コレ、最前の健気な言葉忘れてか。伯父の居ぬ間に自害して、立派な最期と誉められてくれ、  
コレ、婆の方から手を合わす。

◆頼むと言えど逃げまどう 外にはむごや つれなやと 恨みは三方三悪道

微妙 前生の敵同士が、いとし可愛の孫や子に、生まれて憂き目を見するかいなあ。

◆老母が親身の血の涙 時雨の中の枯紅葉 露より先に散りぬらん

(ト太鼓、鐘なり)

◆折からさつと山風の はるかに陣鉦攻太鼓

微妙 あの物音は、敵か味方か。さ、孫よ、おじや。

◆孫の手を引きしおしおと 一間のうちへ入りにける

(ト微妙、小四郎、上手部屋に入る)

◆事こそあれと早速の早瀬 長刀ながなたかいこみ走り出で 木戸押し開けば駆け入る篝火

(ト早瀬奥より出て、木戸を開ける。篝火、木戸の中へ入る)

早瀬 待った待った、高綱がおかもじ、コリヤどこへ。

篝火 ハテ知れたこと、我が子の小四郎取り返す。

早瀬 ならぬならぬ、相嫁あいよめが初見参ういけんさん、この長刀ながなたに乗りたいか。

篝火 エエ推参すいさんな。

◆ときしみ合う 真ん中に三郎兵衛

(ト盛綱、奥より出る)

盛綱 石山の御陣所に事あると覚えたり。やあやあ小三郎はいずれにあるや。

(ト小三郎、奥より)

小三郎 ハア。

(ト小三郎、上手より出で来る)

小三郎 只今ただいまご加勢かせいつかまつる。

盛綱 はや行けゆ。

小三郎 ハア。

◆用意の小具足こぐそく、兜の緒 締むる間遅しと かけ出す

(ト小三郎、向こうへ入る)

◆引っ違えて信楽太郎 息を切ってかけ来たり

(ト信楽、向こうより出て来る)

信楽 御注進ごちゆうしん、御注進ごちゆうしん。

盛綱 待ちかねし信楽太郎、シテシテ様子は何と何と。

信楽 ハハ。

◆さん候 数度すどの戦い

信楽 時政公の御計略ごけいりやくの如く、佐々木四郎左衛門高綱、我が子を取られし憤りいきどお。

◆今宵自身に馬乗り出し

鎌倉の総大将 時政公に 直見じき参つかまつらんと 刀引っさげ飛鳥ひちようのごとく

切り立て 切り伏せ 追いまくり

死にもの狂いのその有様 鬼神おにがみの如く見え候

信樂 されど味方はかねての用意、時政公には数万すまんの警護けいご、盛綱どのには気づかないなく、虜とりこの悴せがれ

を守護しゆごあるべしとの御事おんことなり。なお追々おいおいの御注進ごちゆうしん、はや、おさらば。

◆言葉も足も血氣の若者 戦場さして かけり行く

(ト信樂、向こうに入る)

◆三郎兵衛大息つき

盛綱 南無三宝なむさんぼう、しなしたり。さしもぬからぬ弟高綱、子ゆえの闇やみに眼まなこくらみ、謀はかりごとに落ち

入りしか、うろたえ者。摩利支天まりしてんなればとて、一騎がけの死に軍いくさ、討ち死にせんこと眼前

たり。このうえは母の慈悲、仏間で御回向ごえこうなされかし。

(ト障子を開けて微妙)

微妙 盛綱。

盛綱 母上。ぜひもなき武運の末。

◆残念さよとばかりにて 眼まなこを閉じて奥に入る

(ト盛綱、奥に入る。微妙、障子を閉じる)

◆篝火なおも気はそぞろ 我が子も気遣い夫もいかが 千々に砕くる軍いくさの破れ

二度の注進 勇の大音

(ト向こうより藤太、出て来る)

藤太 御注進、御注進。

早瀬 シテシテ様子は、何と何と。

藤太 へへ。

御悦びそうらへ、軍は充分味方の勝利。大軍に取り囲まれ、集まり勢の高綱方

◆途を失うて逃げ走るを あるいは組み伏せ あるいは射どり 放す矢先はバラバラ

バラバラバラと雷雨 こりやたまらぬと湖の 鮒や亀の子が目をまわす

気つけよ鍼よとひしめく内 すきまもあらせず追討ちに チョイと切って アー痛た

おー痛た このえら痛さ 逃ぐるをやらじと 追いまくり

藤太 諸葛孔明と呼ばれたる、佐々木四郎左衛門高綱を、榛谷の十郎が討つ取って候。なお、追々

の御注進、はや、おさらば。

◆と駆け出せしが 陣笠取ってちよいかぶり 戦場さして 走り行く

(ト藤太、向こうに入る)

◆心散乱燃え立つ篝火 夫の首は渡さじと 行くをやらじと とどむる早瀬

呼び 時政公のお入り。

◆はつと早瀬は大将の 御座の設けと走り入る

(ト早瀬、奥へ入る。篝火へ下手に入る)

◆龍の雲にひいるが如く 一陽の春を待つ平の時政

呼び お入り。

(ト奥より盛綱、向こうより時政が小三郎、新左衛門、家臣を引き連れ出て来る)

◆竹下孫八慌ただしくまかり出で

(ト向こうより孫八出て来る)

孫八 君へ言上したてまつる。最前、和田兵衛秀盛、御陣所に参りしところ、日頃好めし酒をもつて酔い伏せ、居間の四方に金網をかけたれば、もはや籠中の鳥同然と、思いのほかのしれ者にて、隠し火矢をもって天井を打ち抜き、御座の間の白旗奪い取り立ち去って候。

◆言上すれば時政公

時政 敵の陣中へ鎧も着せず只一人、踏ん込むほどの不敵者、汝らが手におうべきや。まず、第一の大敵、佐々木四郎左衛門高綱を討つ取ったれば、腹心の害は払うたり。さりながらこの佐々木、古えの将門にならい、一人ならず二人三人の影武者あつて、いずれをそれと見分けがたし。まことの佐々木か偽首か、弟が首、よも見損じはあるまい。兄盛綱、実検せよ。

◆仰せのもとに新左衛門 首桶御前に直し置く

新左 君の御錠盛綱どの、実検召され。

盛綱 ハハ。

◆三郎兵衛承り 大将に一礼し 無残の弟が死首に ぜひもなき対面やと 飲み込む涙

うしろより 父の死顔拝まんと うかがう小四郎 盛綱が引き開くる 二目とも見わかず

小四郎 ヤア父様か、さぞ口惜しかろう、わしもあとから追っ付きまする。

◆氷の刃 雪の肌 腹にぐつと突き立つる

盛綱 ヤ何故の生害、大将の御前、母人おとどめなされ、仔細を語れ、ナ、ナ、何と。

◆人々あわて介抱なし 小四郎きつと目を見開き

小四郎 何ゆえ死ぬとは、伯父様とも覚えませぬ。卑怯未練も父様に逢いたさ、父を先立て何まざ

まざと、生きていよう。親子いっしょに討ち死にして、武士の自害の手本を見せん。

◆きりりきりりと引きまわす その手にすがり母微妙

微妙 かほど健気な心と知らず、叱った婆が面目ない。

◆こらえてたもと右左 目をしばたたく三郎兵衛

時政 猶予はいかに、かく実検。

◆と御上意に

盛綱 ハハ。

◆疵口ぬぐい耳ぎわまで とつくと改め故実を守り

(ト盛綱、肚芸)

◆謹んで両手に捧げ

盛綱 矢疵に面体損じたれど、弟佐々木高綱が首に、相違ない、イヤ相違ござりませぬ。

◆と御前に直し押し下がれば 時政ご機嫌ななめならず

時政 骨肉の兄が実検といい、首に向かつて小四郎が恩愛の涙、切腹の有様、まことの首の証拠明白。思えば昨日はこの首に、うしろを見せし時政が、今手のもとに誅罰する武運の強さ、あら嬉しや、喜ばしやな、ハハハ。今という今時政が、枕を高く寝らるるも盛綱が働き。褒美には我が着替えの鎧一領残しておく、小三郎をはじめその余の者、陣中にて勝ち軍の恩賞せん。皆万歳を唱えよや。

家臣一 普天の下、卒土の浜。

家臣二 君の威徳に切りしたがい。

家臣三 御代万歳の御寿。

家臣四 只々おめでとう。

家臣皆 存じまする。

時政 盛綱、返す返すも過分なるぞよ。

◆不敵のよそおい辺りを払い 霞かすみたなびく御着長きせなが 本陣ほんじんさして立ち帰る

(卜時政、小三郎、新左衛門、家臣、向こうへ入る。盛綱、時政の去ったのを確認して)

盛綱 佐々木四郎左衛門高綱が妻篝火、計略の偽首にせくび仕おうせたらば、悴せがれ小四郎に最期の暇いとま乞こいを許す、近う近う近う。

◆聞く間遅しと転まろび出で 我が子にひしと抱きつき わっと泣くよりほかぞなき

涙ながらに母微妙

微妙 コレコレ盛綱、偽首にせくびと知って大将に渡したからは京方へ味方する心底しんていなるか。

盛綱 イイヤいっかな心変ぜねども高綱親子が、かほどまでに仕込みけいりやくし計略、父がために命を捨つる幼少の小四郎が、あんまり神妙しんみょう健気けなげさに、不忠と知って大将を欺あざむきしは、弟への志こころざし。

彼が心を察するに、高綱生きてあるうちは、鎌倉方に油断せず、いったん討ち死にせしと偽つて、山奥へ姿を隠し、不意を討たんす謀はかりごと。しかれども底深き北条どの、一応の身替わりはなかなか喰わぬ大将。そこを謀はかって一子小四郎うまうまとこの方へ生け捕られせしは術てだての根組ねぐみ、最前の首実検じつけんに偽首にせくびを見て、ヤレ父上よと誠まことしやかな愁嘆しゅうたんの有様、大地を見抜く北条どのの眼力をくらませしは、教えも教え、覚えも覚えし親子が才智さいち、みすみす偽首にせくびと知りながら、かほどまで思い込んだる小四郎に、何と犬死にさせられましょう。主君を欺あざむく不調法ふちようほう、申し訳には腹一つと、決めた覚悟も負うた子に教えられ、浅瀬を渡るこの佐々木、



無常の風に散りて行く

(ト小四郎落ち入る)

微妙 千騎万騎の大將にもなるべき者を梅檀の。

早瀬 二葉で枯らせし胴欲は。

篝火 神も仏もないことかいな。

◆嘆く微妙の声限り 涙の早瀬 篝火も消ゆるばかりの 思いなり

三郎兵衛涙目を払い

盛綱 嘆きにまぎれて遅れたり。鎌倉への申し訳、この期において。

◆差添えに手をかくれば

(ト奥より秀盛)

秀盛 コレ待て盛綱、和田兵衛秀盛これにあり、敵を見かけて自害とは、臆したるか。

◆立ち出ずれば

(ト秀盛、奥より出で来る)

盛綱 幸いの良き敵。帰らばそのまま帰さんに、運尽きし秀盛、その座一寸も動かさじ。

◆柄に手をかけ詰め寄れば

秀盛 この秀盛が習い覚えし、南蛮流の懐鉄砲、受けてみよ。

◆狙いはそれで鎧櫃よろいびつ 内に忍びし榛谷十郎はんがえ 太腹射抜かれふとばら のた打ったり

(ト秀盛、鎧櫃を撃つ。内より榛谷出て苦しみ倒れる)

秀盛 見よや盛綱。底の底まで疑い深き北条が隠し目付めつけ、御辺ごへんが手にかけてざれば不忠にあらず。今また御辺ごへんが自害せば鎌倉への義は立つとも、佐々木が首は偽首にせくびなりとたちまち露見ろけんし、高綱親子がかほどまで砕きし心も水の泡。時節を待つて佐々木高綱、まことはここにと打つて出でたるそのときに、潔いさぎよく腹切らば忠も立ち義も全うす。腹の切りよう、早はえい早はえい。

◆と制すれば

盛綱 実げに過あやまったり我が命、しばらく生きるも弟へ、これも情けのひとつには甥おいへの寸志追善供養ついでんくよう。

秀盛 野送りのおく万事ばんじは一家の内証いっけ。

盛綱 諸事何事しよじなにごともこの座ぎり。

秀盛 表は京方。

盛綱 鎌倉方。

◆右大将実朝さねともの御座ござの白旗しらはた 奪うばい取りしは軍いくさの吉左右きつそろう

秀盛 とめて見ぬか。

◆とめて見ぬかと出て行く

盛綱 盛綱が陣中にて、味方の武士を打つたる曲者くせもの、返せ。

◆戻せは弓矢の儀式

微妙 孫や甥子の亡骸に。

早瀬 憂きこと三井の暮れの鐘。

篝火 消えゆく子より親心。

秀盛 我れ唐崎の夜の雨。

盛綱 父には一目、栗津の嵐。

秀盛 さらば。

盛綱・秀盛 さらば。

◆夕べを照らす瀬田の橋 別れてこそは 出て行く

(幕)